

態度と行動の一貫性について

——媒介変数としての Self-Monitoring と Self-Esteem の効果*——

辻 伊都子
田 中 國 夫

はじめに

態度と行動の関係は、社会心理学においては古くから新しいテーマである。Festinger (1957) は認知的不協和理論の中で、態度が、生じた行動内容に一致するように変化することを示唆した。つまり、私的意識とくい違う内容の行動をした人は、その行動に対する認知と私的意識の認知との間に不協和が生じ、その不協和を低め認知間に斉合性を得るために、行動内容と一貫するよう態度を変える傾向があるのである。

最近では、態度と行動の一貫性の問題について、多くの研究がなされている。つまり、測定された態度と一致した行動を示すか否かの問題である。態度は行為者の行動と深く関係すると考えられてきたが、次第に態度と行動は一貫しにくいことが明らかとなってきた。

本研究は、この態度と行動の一貫性に関する実験的研究を行うものである。

1. 目 的

態度の概念は、社会的行動を決定する行為者の要因の一つとして考えられているが、特定の状況における特定個人の行動を予測しようとする場合、その対象や状況についてのその人の態度のみを用いても十分ではない、という見解がある。

態度と行動が必ずしも一貫しないのは、人間が行動する際、その手がかりとして態度という内的

要因の他に、まわりの状況や対人関係などの外的要因も加わるからだと考えられている。Fishbein (1967) は行動予測モデルを作り、行動の予測因として行動に対する態度と主観的規範 (subjective norm) という2変数と、経験的に決定される重み (empirically determined weights) 変数を考えた。重みづけに作用する要因として、Ajzen と Fishbein (1972) は、①行動の内容、②行動が遂行される時の条件、③行為者の特性、を挙げている。

Snyder (1974) の Self-Monitoring (以下 SM と略す) は、この重みづけに作用する行為者の要因として考えられている (Sherman & Fazio, 1983)。

Snyder (1974, 1979) は、人々が社会的相互作用の中で、他者が自分たちに対して形成する印象をどの程度積極的に統制するか、に関心を持ち、自己表出行動の監視や統制に関する SM という概念を提唱した。彼によると、具体的な SM の過程は、外的状況に関心を持ち注目し、表出行動をそれを考慮して統制し演技をする、というものである。

以下に Snyder の SM に関する見解をまとめる。SM の方策は、種々なパーソナリティ特性を持つ人々が種々な状況において使用するが、同時に SM 過程においては個人差が存在する。つまり SM の傾向の強い人 (High SM) は、自分の行動がその状況および対人関係の中で適切なものであるか否かを示す手がかりに敏感で、自分の行動や言語的および非言語的な自己呈示

*本稿は、立教大学文学部心理学科、昭和59年度学士論文をまとめたものである。

(Self-presentation) を統制するためにこれらの手がかりを用いることが多いとしている。これとは対照的に、SM 傾向の弱い人 (Low SM) の自己呈示は、社会的状況に適合するように意識的に組み立てられたものではなく、むしろその人の内的な感情状態や安定した態度によって統制する傾向が強い、としている。

この SM の個人差に基づき導かれたいくつかの仮説の中に、態度と行動の一貫性に関する仮説がある。それは、SM 傾向の個人差の違いは、行動のための全ての手がかりの中で態度をどの程度重視するかの違いである、とするものである。SM 傾向が強い人は、行動の手がかりとして態度の比重が小さいので、態度と行動の一貫性は弱い。また SM 傾向が弱い人は、行動の手がかりとして態度の比重が大きいので、態度と行動の一貫性は強い、と考えられる。

この SM と態度と行動の一貫性について検証した研究は、Snyder & Tanke (1976), Snyder & Swann (1976), Zanna, Olson, & Fazio (1980), Tunnell (1980), 岩淵, 田中 (1982), Cheek (1982) などがある。

Tunnell (1980), Cheek (1982) は、自己評価と他者評価の間の関係に及ぼす、SM の緩和効果を研究した。SM 傾向の強い人は状況によって強く方向づけられるので、彼らの演技能力をさまざまな状況でさまざまに行動することに用いる。ゆえに SM 傾向の強い人は、自己評価と他者からの評価に大きな違いを引き起こしやすい、という事を実証した。

このように、本研究の第一の目的は態度と行動の一貫性の媒介変数として SM を取り上げ、その効果を検討することである。

さらに、態度と行動の一貫性を媒介するパーソナリティ特性は SM のみではないと考えられる。種々なパーソナリティ特性を同時に持った人間が SM の方策を用いることを考えれば、それらのパーソナリティ特性の中には態度と行動の関係を媒介する SM の効果を調整して、SM の傾向を促進したり抑制したりするパーソナリティ特性があると考えられる。また、SM とは独立して態度と行動の一貫性の媒介変数となるパーソナリティ特性もあると考えるのも可能であろう。

ゆえに、態度と行動の一貫性の媒介変数として SM を取り上げ、SM 傾向の強弱からその一貫性の大きさを予測する場合、SM の測定と共に別のパーソナリティ特性の測定を行い、その特性と SM の両方の傾向の程度によって態度と行動の一貫性の強さを予測した方が、SM のみで態度と行動の一貫性の強さを予測するよりも予測性が高められると考えられる。

そこで本研究では、SM とは別の第二のパーソナリティ特性として Self-Esteem (Rosenberg, 1979) を考えた。Self-Esteem (以下 SE と略す) とは自己に対して肯定的に評価を行う傾向のことで、SE 傾向の強い人は自分の能力に対する自信も高い。ゆえに他者を自分の行動決定の手がかりに用いるような他者志向的な行動は少ないと考えられる。つまり SE を態度と行動の一貫性の強さを媒介するものとして取り上げた場合、SE は他者志向的行動——他者への注目や表出行動の統制——を妨げるため、態度と行動の一貫性を強めるのではないかと考えられる。

ここで SM と SE の関連を過去の研究から調べると、Briggs ら (1980) は -0.17 の相関を見出し、SM と SE の関連は負の相関で、かなり弱いといえる。ゆえに SE と SM はほとんど独立した特性であり、両者は独立して態度と行動の一貫性に媒介すると考えられる。しかし、Briggs らは SM 各因子の外向性 (Extraversion)、他者志向性 (other-Directedness)、演技性 (Acting) と SE の相関も見出したが、それによると SE と SM の他者志向性因子とは -0.49 の負の相関で、また SE と SM の外向性とは $+0.38$ の正の相関を見出している。ゆえに SE を SM の方策を調整する変数として考えれば、SE は SM の中でも他者志向性因子は抑制し、一方、外向性因子は促進しながら SM を調整し、SM を介して態度と行動の一貫性に媒介するのではないかと予想される。

従って本研究では SM とは別のパーソナリティ特性である SE を取り上げ、両者の組み合わせを考えることで態度と行動の一貫性の強さの予測性が高められるかどうかを検討する。

2. 仮説

過去に態度と行動の一貫性の媒介変数としての

有効性を実証されてきた SM を、主となる変数とし、それに SE を加えて SM と SE の両方から態度と行動の一貫性の大きさを予測すると、以下のようになる。

① SM 傾向の弱い人 (Low SM) は SM 傾向の強い人 (High SM) より、自己の内的要因 (態度) を重んじて行動するので、結果として態度と行動の一貫性は強い。そして、この傾向は Low SM でも特に SE の傾向が強い人 (High SE) に顕著に認められるだろう。

② SM 傾向の強い人は SM 傾向の弱い人より、態度と行動の一貫性は弱い。そして、この傾向は High SM でも特に SE 傾向の弱い人に顕著に認められるだろう。

①, ②の仮説を整理しまとめたのが、Table 1 である。

Table 1 SM と SE の掛け合わせごとの態度と行動の一貫性の強さの順位

| SE \ SM | High | Low |
|---------|------|-----|
| High | 3 | 1 |
| Low | 4 | 2 |

3. 方 法

(1) 概 略

実験に先立ち、被験者を選定するために、R 大学女子学生 70 名、K 大学女子学生 124 名に、SM スケール、SE スケール、それに男女雇用差別問題と性役割意識についての態度調査をするための態度調査用紙を配布し、回答させた。

SM スケール、SE スケールそれぞれの得点に基づき、被験者 80 名を (SM—高低) × (SE—高低) の 4 グループに分けた。SM スケールは 73 点以上を高群、72 点以下を低群とし、SE スケールは 24 点以上を高群、23 点以下を低群とした。なお選定にあたり、なるべく態度がはっきりした者を選んだ。測定系列を 2 つ設けるために各グループをさらに A 群、B 群に分けた。

実験日には、被験者は他の一人の学生と男女雇

用差別問題について 10 分間討論するように教示された。そして討論の前に、討論者はお互いの意見を作文として表し、その作文を相互に交換するように言われた。被験者に見せた相手の作文は、被験者と対立した態度表明の内容になるように実験者が作成したものである。それを読んだ後、被験者は自分の意見を 200 字程度で書いた。

全ての被験者の作文は、男女雇用差別と性役割意識という点から、4 人の評定者に評定された*。(10 段階尺度) のこの評定点の 4 人の評定者の平均を、各被験者の行動得点とした。

本研究では、行動得点と態度得点の相関係数を態度と行動の一貫性の強さとみなした。

(2) 質問紙

本実験で用いた SM スケールは、Snyder (1974) が作成したもので、25 項目、5 件法 (「非常にそう思う (5 点)」～「全くそう思わない (1 点)」) の反応形式のものである。項目内容は、Table 2 の通りである。

次に SE スケールは、Rosenberg (1979) が作成したもので、10 項目、4 件法 (「全くあてはまらない (1 点)」～「よくあてはまる (4 点)」) の反応形式のものである。

態度調査は、本実験のために新たに作成したもので、母として妻としての性役割意識と女性が家庭外で働くことについての意見を調査するためのものである。(e.g. 「女性の果たさなくてはならない第一の仕事は、母として子を生き育てることである。」) 測定項目は 5 項目で、反応形式は 7 件法 (「非常に賛成である」～「非常に反対である」) である。

1 回目の態度調査には、他に 10 項目、2 回目の態度調査には、1 回目とはまた別の 20 項目の偽装項目が加えられた。

(3) 討論内容

被験者に、後日討論するとして提示した討論内容は、以下のとおりである。

「ある会社が求人募集したところ、能力においてもキャリアにおいても全く差のない男性 (M 男) と女性 (S 子) が一つのポストをめぐる対立することになりました。M 男も S 子も、ともに同年

* 評定の一致度を検定するため、2 人ずつ計 6 組の評定者の評定点の相関係数を求めた。r = .817 ~ r = .714 の間に集中したため、評定の一致度はかなり高かったといえよう。

齡で既婚者、また両者ともに小学生の子供がいます。会社側はM男を採用することにしましたが、S子はそれを男女差別だとして裁判に持ちこむことに決心しました。この事態におけるS子に対して、あなたはどうかお考えですか。」

(4) 討論相手の態度の表示

本研究においては、行動の手がかりに態度という内的手がかりを重んじるか、周りの状況や規範という外的手がかりを重んじるかを決定するパーソナリティ特性としてSMやSEを扱うわけであるから、態度以外の対人的手がかりを被験者に与えることが、行動決定における態度の重みづけの個人差をはっきりさせる上で有効であると考えられる。また本実験手続きにおいては実際には討論相手との接触はないので、討論をするという状況的手がかりを与える必要があった。そのため、討論相手の意見として被験者とは対立した意見の作文*を前もって作り、それを被験者に見せる手続きを用いた。

1回目の態度調査の関係項目の合計点が中間点の合計点(20点)より高い被験者、つまり性役割行動に対して賛成の態度を持つ被験者には、S子が会社側と争うことに賛成の意見文を、また関係項目の合計点が中間点の合計点より低い被験者、つまり性役割行動に対して反対する態度を持つ被験者には、S子が会社側と争うことに反対の意見文を示した。この2種類の作文内容は、次のとおりである。

・ S子に賛成する意見文・

「私はS子を味方したいと思う。なぜならばS子を含めて女性は母として妻としての役割にしばられたり、仕事で女性だという理由で制約を受けることはないと思うからである。……(以下省略)……」

・ S子に反対する意見文・

「私はS子はそのポストを諦めるべきだと思う。なぜならS子には小学生の子供がおり、彼女はまず第一に母親としてその子を育てるべきだと思うからである。……(以下省略)……」

(5) 手続き

後日行なわれる実験のための準備という理由

で、被験者を数名ずつ実験室に呼んだ。

被験者は机の前にすわると、被験者宛ての封筒を手渡された。その封筒の中には、(i)作文を書く際の教示文と討論内容を記した用紙、(ii)討論相手の手書きの作文、(iii)回答用紙、が入れていた。

(i)と(ii)の用紙を読ませた後、A群の被験者には、先にその討論問題に対する自分の意見を表す作文を書かせ、次に2回目の態度調査を行なった。

B群の被験者には、(i)と(ii)の用紙を読ませた後、「これは討論とは関係ありませんが、参考のために作文を書く前に答えて下さい」と教示し、2回目の態度調査を先に実施し、その後で討論問題に対する自分の意見を述べる作文を書かせた。A群、B群とも作文書きにおいては制限時間を設けなかった。

作文、態度調査の両方が済むと、後日実験前に連絡をとる旨を伝え、被験者を退室させた。実験の趣旨説明は全ての被験者のデータ収集が終了した段階で行なった。

4. 結果

(1) 被験者選定の有効性

被験者選定の有効性をチェックするために、SM得点、SE得点がHigh群とLow群で有意差があるかどうかを、A群、B群、全体についてそれぞれt検定を使い調べた。

SMは、A群 $t = -11.18$ ($P < .001$)、B群 $t = -11.84$ ($P < .001$)、全体 $t = -16.41$ ($P < .001$) で全て有意差が見られた。SEはA群 $t = 11.18$ ($P < .001$)、B群 $t = 9.90$ ($P < .001$)、全体 $t = 14.73$ ($P < .001$) で、全て有意差が見られた。ゆえにSMもSEもHigh、Low群間での得点差は有効といえる。

(2) SMスケールの因子分析

SMスケールのデータに基づいて、バリマックス回転による主成分分析の因子分析を行なった。固有値1.0以上で打ち切った結果、4因子が抽出された。因子負荷量はTable 2の通りである。

.300以上の負荷量を持つ項目を各因子ごとに拾うと、第1因子には12、14、21、22、23の項目が

*実験者他数名が、1名ずつ手書きで転記した。

Table 2 SM スケールの項目内容と因子負荷量

| 項 目 内 容 | 因 子 | | | |
|---|-------|-------|-----------------|----------------|
| | 外 向 性 | 演 技 性 | 他者志向性 反態度的行動 | 他者志向性 奉仕的行動 |
| 1. 人の行動をまねるのは苦手だ。 | .13 | .51 | .29 | .15 |
| 2. 自分の気持ちや考え、信じていることを、行動にそのままあらわす。 | -.09 | -.08 | .40 | .07 |
| 3. パーティや集まりで、他の人が気に入るようなことを、言ったりしたりしようとはしない。 | .12 | -.06 | .16 | .03 |
| 4. 確信をもっていることしか主張できない。 | .22 | .16 | -.08 | .06 |
| 5. あまり詳しく知らないトピックスでも、即興のスピーチができる。 | .21 | .59 | -.09 | -.05 |
| 6. 自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある。 | .26 | .21 | .06 | -.36 |
| 7. いろんな場面でどう振るまっていかわからないとき、他の人の行動をみてヒントにする。 | .03 | .02 | .03 | .07 |
| 8. たぶん、よい役者になれるだろうと思う。 | .11 | .39 | .13 | .09 |
| 9. 映画や本、音楽などを選ぶとき、友人のアドバイスをめったに必要としない。 | .10 | -.35 | .04 | -.00 |
| 10. 実際以上に感動しているかのように振るまうことがある。 | .06 | .15 | .09 | .65 |
| 11. 喜劇を見ているとき、一人よりみんなと一緒にの方がよう笑う。 | .08 | -.06 | -.04 | .14 |
| 12. グループの中で、めったに注目的にならない。 | .51 | .07 | .02 | .10 |
| 13. 状況や相手が異なれば、自分も違うように振るまうことがよくある。 | -.05 | .09 | -.05 | .19 |
| 14. 他の人に、自分に好意をもたせるのが、特別上手な方ではない。 | .50 | .19 | .36 | .16 |
| 15. 本当は楽しくなくても、楽しそうに振るまうことがよくある。 | -.06 | -.04 | .53 | .38 |
| 16. 私は、常に見かけのままの人間というわけではない。 | -.02 | .09 | .09 | .22 |
| 17. 人を喜ばせたり、人に気に入ってもらおうとして、自分の意見や振るまい方を変えたりしない。 | -.00 | -.08 | .08 | .54 |
| 18. 自分はエンターテイナーであると思ったことがある。 | .18 | .59 | -.02 | .08 |
| 19. 仲良くやっていったり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ。 | -.04 | -.07 | .17 | .06 |
| 20. これまでに、ジェスチャーや即興の芝居のようなゲームで、うまくできたためしがない。 | .20 | .18 | .07 | -.14 |
| 21. いろいろな人や状況にあわせて、自分の行動を変えてゆくのは苦手だ。 | .50 | .11 | .35 | .02 |
| 22. パーティでは、冗談を言ったり、話したりするのは、他の人に任せて自分は黙っている方だ。 | .70 | .10 | -.08 | .15 |
| 23. 人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない。 | .70 | .17 | .02 | -.12 |
| 24. よかれと思えば、相手の目を見てまじめな顔をして、うそをつくことができる。 | .09 | .08 | .05 | .10 |
| 25. 本当はきらいな相手でも、表面的にはうまく付き合っている。 | .12 | .07 | .71 | .00 |
| 寄 与 率 | 34.7 | 18.9 | 11.1 | 9.4 |

含まれていた。これらの項目は対人場面における社交性や積極性を示しており、外向性

(Extraversion) と命名できる。

次に第Ⅱ因子には1, 5, 8, 9, 18の項目が

含まれていた。これらの項目は人前で自分をうまく作り変えたり喜ばせたりすることを示しており、演技性 (Acting) と命名できる。

第Ⅲ因子には、2, 14, 15, 21, 25の項目が含まれていた。これらの項目は他人を考慮して自分の態度に反する行動に出ることを示しており、他者志向性一反態度的行動傾向 (Other-directedness/counterattitudinal behavior) といえる。

第Ⅳ因子には、6, 10, 15, 17の項目が含まれていた。これらの項目は人を楽しませたり気に入ってもらおうとする意欲を示しており、他者志向性一奉仕的行動傾向 (Other-directedness/servicing) と命名できる。

次に、各因子に含まれた各項目の得点の総和を各被験者ごとに求め、その総和点をもとに各因子間のピアソンの相関係数を算出し、内部相関を検討した。その結果が Table 3 である。

Table 3 SM 4 因子の内部相関

| | FAC I | FAC II | FAC III | FAC IV |
|---------|-------|--------|---------|--------|
| FAC I | | | | |
| FAC II | .48 | | | |
| FAC III | .52 | .33 | | |
| FAC IV | .32 | .36 | .50 | |

(3) SM スケールと SE スケールの相関

SM 全体と SE, SM 各因子と SE の相関は Table 4 のとおりである。SE は SM の外向性因子と演技性因子とに有意な正の相関が認められた。しかしその相関はいずれも高くはなかった。

Table 4 SM スケールと SE スケールの相関

| SM SE | 全 体 | 外向性 | 演技性 | 他 者 志 向 性 | |
|----------|-------|------|------|-----------|-------|
| | | | | 反態度的 | 奉 仕 的 |
| 全体 | .23** | .38* | .21* | .10 | .08 |

* P < .01 ** P < .001

(4) 態度と行動の一貫性 (仮説の検証)

まず測定系列による A 群, B 群の区別なしに被験者 4 グループごとの態度と行動の相関係数を算出した。SM の High, Low 間, SE の High, Low 間, 4 グループ間の相関の有意差を検定したが、いずれも有意差は認められなかった。

次に測定系列の A 群, B 群それぞれの被験者 4

Table 5 A 群と B 群における態度と行動の相関値

| SE \ SM | High | Low | |
|---------|-------------------------|------------------------|------------------------|
| High | -.230 n = 10 .772 | .591 n = 10 .02 | .251 n = 20 .392 |
| Low | .279 n = 10 .516 | .419 n = 10 -.04 | .330 n = 20 .251 |
| | .138 n = 20 .648 | .502 n = 20 .010 | |

各セルの上段が A 群, 下段が B 群である。

グループ間の態度と行動の相関係数を算出したところ、Table 5 を得た。

A 群について、SM の High, Low 間, SE の High, Low 間, 4 グループの相関の有意差検定を行ったが有意差は認められなかった。しかし High SM/High SE は他の 3 グループと異なり、態度と行動の間に負の相関が認められ、態度とは対立する行動を示す傾向があった。

B 群についても A 群と同様に検定を行なったところ、SM の High, Low 間で相関に有意差が認められた。(C. R. = 2.23, P < .05) SE の High, Low 間と 4 グループ間では有意差はなかった。ゆえに B 群においては SM 傾向が強いほど態度と行動の一貫性が強くなった。

5. 考 察

(1) SM スケールの因子分析の検討

本研究においては因子分析の結果、SM の下位因子は 4 つ抽出された。Gabrenya & Arkin (1980) は演技性, 社交性一社会的不安, 他者志向性, スピーキング能力の 4 因子を抽出した。また Briggs ら (1980) は他者志向性, 外向性, 演技性の 3 因子を抽出したが、本研究での結果は Briggs らの研究の他者志向性因子が、第Ⅲ因子と第Ⅳ因子の 2 つに分かれて現れたと考えられる。

第Ⅲ因子は他者志向性の中でも、自分の内的な態度や感情を犠牲にして他者に適したものにしてしまう、反態度的行動傾向を表す。これは、SM 自体が印象管理を意識的に行う性格特性である以上、自分のものとは逆の態度を表明せざるを得ない場合があることを考えれば納得のいくことであ

る。

また第IV因子は、他者志向性の中でも、他者を快適にさせたり他者の気持ちを大切にすると、奉仕的行動傾向を表している。

因子間内部相関はどの因子間でもかなり高い相関があった。これは、SMをいくつかの下位因子に分けてそれぞれの下位因子ごとの影響を調べるアプローチの非有効性を示唆する。その意味で本研究では、SMの全体得点を用いてSMの効果は検討したが、各因子ごとの効果は検討しなかった。

(2) SMとSEの関係について

SEとSM各因子との相関は、予想とはかなり異なった。

本研究ではBriggsら(1980)の因子分析の結果をもとに、SEはSMの他者志向性因子とはかなり強い負の相関があり、(Briggsらは $r = -.49$) SMの外向性因子とは弱い正の相関があるものと考えていたが、(Briggsらは $+.38$) 本研究で得られた結果はSMは外向性因子とは正の相関が認められたが、($r = .38$) 他者志向性因子とは相関が認められなかった。($r = .01$) ゆえに、SE傾向の強い人は外向性も強い傾向はあるが、他者志向性とは全く関連をもたないのである。

SEとSM各因子の関連についての影響の予想違いが、態度と行動の一貫性を媒介するSMの作用にも、SEは仮説とは違った影響を及ぼしたと考えられる。

(3) 態度と行動の一貫性に媒介するSMとSEの効果

測定系列のA群とB群を一括して実験結果を処理した場合は、SMの効果もSEの効果もSEとSMの掛け合わせの効果も認められなかった。

しかし、A群(反対意見との接触→作文課題→態度調査の測定系列)では、SMの傾向の強弱による一貫性の強さの違いは、有意には達しなかったが、仮説と一致した結果が得られた。次にSMにSEを加えて分析したところ、SMとSEの掛け合わせの効果に仮説とは違う傾向がみられた。つまりHigh SM/High SEのグループのみ態度と行動の相関は $-.230$ という負の相関を示したのである。この相関値より、A群におけるHigh SM/High SEのグループは、反対意見に接触することによって、反対意見の討論相手と同じ方向

に自分の態度を変化させて表明したことが判明した。

本研究では最初、SMと同じくSEが強いと、SEは態度と行動の一貫性を強め、High SM/Low SEのグループよりは態度と行動の一貫性は強いだろうと予想した。しかし、ここで得られた結果は、仮説とは全く逆であった。尚、A群では被験者の態度と討論相手の反対意見との違いの大きさに、グループ間の違いはみられなかったため、この結果は反対意見が行動を変化させる効果に強弱があったためとは考えられない。

そして、High SMの中でもHigh SEのグループが態度とは逆の行動をした、という結果は、SM各因子とSEの相関値、つまりSMの外向性因子とSEは正の相関がありSMの他者志向性因子とSEは相関がなかったことを考え合わせると説明できる。

まずSEの、他者志向性因子に対する意味を再考したい。SEは自分に対する自信を表すので、自分に自信がある人は自分の態度を重んじ、状況に応じて自分の態度を偽って示したりする方策は用いないであろう、と予想したが、SEと他者志向性因子は相関が認められなかったことからこの考え方は否定される。

代ってSEは人とのつき合いを上手に行おうとする外向性因子と正の相関があることから、SE傾向が強いことは自分の社会的行動のさまざまな面に自信を持ち、たとえばSMの方策を用いる時にも印象管理の結果に対する自信が生まれ、また自分の意志とは反したことを行動に表し本当の自分を偽ったり装ったりすることに対しても自責の念が弱く、肯定的な評価をし、そのためにSE傾向が強いとSMの効果も強められるといえよう。SEは単独では態度と行動の一貫性の媒介変数としての効果が見られなかったことから、上述の解釈はSEはSMの効果調整するパーソナリティ特性であるという考え方を示唆するものだが、この解釈の妥当性については将来の検討結果を待たねばならない。

最後にB群(反対意見との接触→態度調査→作文課題の測定系列)ではSEの効果は見られなかったが、SMの効果に仮説とは反対の結果が出た。つまり、SM傾向が強いほど態度と行動に強い一

貫性が認められた。この結果は態度と行動の一貫性の媒介変数として、SMが有効か否かの疑念を引き起こす。ただしこの結果には、実験状況による影響もあったといえる。B群では先に態度調査を行なったので、それによって問題についての態度が顕著になり、本来ならば行動統制を行なうはずのSM傾向の強い人が行動を変化させにくくなったと考えられる。

またA群とB群では被験者にとって重要な意味を持つ他者に違いがあり、それが原因になっているとも考えられる。つまり、A群では先に行動を測定したが、そこでの重要な意味を持つ他者は討論相手であった。ゆえに討論相手に対する印象の方が、次の態度測定を行う実験者の印象よりも強くなる。そこでSM傾向の強い人は討論相手の反対意見を強く考慮するので、態度と行動の一貫性は弱くなると考えられる。

反対にB群では先に態度調査を行なったので、その態度調査の回答を見る実験者が重要な意味を持つ他者となったといえる。そこでSM傾向の強い人は最初に注目した実験者の方の印象が強くなり、実験者に態度と行動の一貫性を示すことで良い印象を植えつけようとしたと考えられる。

(4) パーソナリティ研究におけるSMの意義

最後に、本研究で取り上げたSMの研究上の意義について、一般的に言及したい。

パーソナリティの実験的研究は長年、法則定立的 (nomothetic) アプローチをとってきた。法則定立的アプローチは、まず多数の個人のある特性について質問紙などによって測定する。そしてその特性が関与すると考えられる行動得点との相関をとり、その相関が高ければ、その性格特性の強弱によって関連した行動の予測性が高められるのである。

しかし、一般的に言えば、このアプローチは人と行動には注目しているが、状況については事実上考慮されていない。つまり法則定立的アプローチは、ある特性を持つと考えられる個人ならばあらゆる状況において、その特性によって方向づけられる、ある特定の行動をするのみなしている。

だが、異なる場面でのパーソナリティ特性とその特性に関連した行動との相関は、一般に低くなるのが普通である。事実、Mischel (1968) は場

面ごとの特性の一貫性についての文献研究の結果、一貫性は最高でも+.30しかなく、高い相関は認められないとしている。ゆえに行動と関連のあるパーソナリティ特性だけでは行動予測は不十分なのである。

これを改良する手段として、別の角度から行為者に注目し、状況によって変化する人と変化しにくい人を区別し、変化しにくい人のみが、実験状況以外の状況でも実験状況と同様の行動をするのみなす方法がある。

それには、BemとAllen (1974) のように状況による可変性というパーソナリティ特性を考え、その特性傾向が強いか弱いかで行為者をカテゴライズし、低い可変性の人のみを状況を越えて行動予測するのが可能である、とみなす研究もある。

本研究で扱ったSMも、行動を予測する時に状況を考慮するためのパーソナリティ特性だといえよう。つまりSM傾向の弱い人のみが、ある行動をした際彼らはその他の状況においても同じ行動をするだろう、と予測されるのである。

本研究では、態度からの行動予測に貢献するものとしてSMを扱ってきた。このSMというパーソナリティ特性も法則定立的アプローチをとっているので、SMのパーソナリティ特性も状況によって現われ方が違う場合が考えられる。とはいえ、SMはパーソナリティ研究の、状況を無視した法則定立的アプローチに対して、大きく貢献していると言えよう。

参考文献

- Ajzen, I., & Fishbein, M. 1972 Attitudinal normative variables as factors influencing behavioral intentions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 1-9
- Bem, D. J., & Allen, A. 1974 On predicting some of the people some of the time : The search for cross-situational consistency in behavior. *Psychological Review*, 81, 506-520
- Briggs, S. R., Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1980 An analysis of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 679-686
- Cheek, J. M. 1982 Aggregation, moderator variables and the validity of personality tests. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1254-1269
- Festinger, L. 1957 A theory of cognitive dissonance.

- Fishbein, M. 1967 Attitude and the prediction of behavior. *Reading in Attitude theory and measurement* 477—492
- Gabryna, W. K., & Arkin, R. M. 1980 Self-monitoring scale : Factor structure and correlates, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 13—22
- 岩淵千明, 田中国夫, 中里浩明, 1982, セルフ・モニタリング尺度に関する研究, *心理学研究*, 53, 54—57
- 岩淵千明, 田中国夫, 1982, 行動と態度の一貫性における印象管理の影響, *関西学院大学社会学部紀要*, 44, 97—109
- Mischel 1968 *Personality and assessment*.
- Rosenberg, M. 1977 *Conceiving the self*. New York : Basic Books.
- Sherman, S. J. & Fazio, R. H. 1983 Parallels between attitudes and traits as predictors of behavior. *Journal of Personality*, 51, 308—345
- Snyder, 1974 Self-Monitoring of Expressive Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526—537
- Snyder, M. 1979 Self-Monitoring processes. In L. Berkowitz(Ed.) *Advances in experimental social psychology* 12 New York : Academic Press, 85—128
- Snyder, M. & Swann, W. B. 1976 When actions reflect attitudes : The politics of impression management. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 1034—1042
- Snyder, M. & Tanke, E. D. 1976 Behavior and Attitude : Some people are more consistent than others. *Journal of Personality*, 44, 510—517
- Tunnell, G. 1980 Intraindividual consistency in Personality assessment : The effect of Self-Monitoring. *Journal of Personality*, 48, 220—231
- Zanna, M. P., Olson, J. M. & Fazio, R. H. 1980 Attitude-Behavior Consistency: An individual difference perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 432—440